



僧ラスプーチンへのオマージュ」(坂元良江・関谷滋編)となり脱走兵がいた時代』思想の科学社刊に掲載)には、ジャテックの中でどんな活動をしたのか、それが楽しいこととともに実に辛いものもあったということが、生き生きと描かれている。

ところで、吉武輝子さんは、敗戦の14歳の時に米兵5人から性暴力を受けた凄まじい体験を、自ら公表された(2010年、文芸春秋スペシャル結婚特集号)ことは著名だ。藤枝さんは、これほどひどい体験ではないが、私が直接聞かされた驚くべき話がある。

50年代初めのことだが、たしかプラハにあった世界教員組合連合の本部に、日教組が藤枝さんを日本代表として駐在させるということになった。当時、彼女は日本共産党に入党していた。それで、藤枝さんは訪欧するに際して、党の本部に呼ばれ、党幹部からいろいろ「指導」があった。その途中、突然、壮年の男性がその部屋に呼ばれてきた。そして、幹部は、彼女に対し、日本を出るに際、この人物と結婚してもらいたいと思うのだがどうか、と言われたのだ。彼女が驚いたのは当然だ。まったくあつたこともない知らぬ男性なのだ。事情はこうだった。当時、日本共産党は、中国共産党を支持し、それと反対するソ連に對抗する政策をとっていた。世界教員組合連合を含め、世界労連だの世界婦人会議などの国際組織の本部は多く東欧諸国に置かれ、これらの国はすべてソ連派の影響力下にあつた。

そういう国にある国際組織の本部に、日本から送られた活動家たちは、多くその影響を受け、「修正主義者」(ソ連派について言った批判的表現)になってしまふ、そういう影響をはねかえし、「修正主義者」にならぬようにするには、しっかりとした男性党员と一緒に生活することが大事なのだ、ぜひ、この男性と結婚してプラハへ行ってもらいたい、これが党幹部の話だったのだ。

藤枝さんがこんな「命令」だか「指導」だかを受けられるはずは当然なかつた。彼女は共産党から脱党することになる。

今ではいくらなんでも、日本共産党はこんな「指導」をできないし、しないとは思いますが、50年代前半には、まるで戦前のハウスキーパー問題と同じような性暴力の姿勢を党幹部は平気で持っていたのだ。藤枝さんが『性の政治学』やメリナ・メルクーリの『ギリシャ・わが愛——独裁とたたかう女優半生記』(合同出版 75年)などを訳する活動家になるのも、当然のことだったろう。

### 静かな酒店「伊勢藤」での話

吉武さんの葬儀があつた毘沙門天の正面、路地を入った奥に「伊勢藤」という古い風情



のある飲み屋がある。昔、私が通つた店だったので、前まで行つてみたのだが、昔のまま、あらためて行つてみたいなと思ひ、つい先日寄つてみた。

以前は、「酒は静かに……」と牧水の色紙を飾り、うるさい客には、そろそろお酒はお仕舞いにしましょう、と主人が勧めるのも有名な静かな店だった。ベ平連の初期、事務所が神楽坂にあつて、小田実さんや鶴見良行さんと何度も通つており、参議院議員の宇都宮徳馬さんや、国際会議の外国代表たちを連れて行つたこともある。

何でこんな酒場の話をするのかと言われそうだが、ベ平連が家賃を払つて最初に借りた神楽坂上の事務所は、実はこの「伊勢藤」の主人が持つ8畳ほどの小屋だったのだ。「殺すな」の意見広告も、ここで運動は展開されたのだ。

久しぶりに入った店の主人は50歳代で、当時の人と違つていた。尋ねてみると、それでしたら父でしょう、5年前に80歳で死にましたということだった。「昔に事務所を借りたことがあるのだが……」と言つたら、たしか吉川さんという人がいたな、という名前まで出されてびっくりした。ベ平連運動についての拙著をさしあげたら、母はまだ元気でですから、とても嬉しく思うでしょう、と言われた。あらためて入つた店は、古い通りのいい店のままであつた。

(よしかわ・ゆういち/本会共同代表、写真も筆者)